

な六角堂を、学校の建築科講師金澤庸治氏に、設計を御依頼致し、其内に、當時の校服を着せられた先生を、御納めする事と決定致しましたので、其原型の製作を日本美術院同人平櫛田中氏に御依頼致し鑄造は阿部胤齋氏に御依頼いたした様な次第であります、幸ひ學校に岡倉先生が校長室で御使用になつた、椅子がありましたので、其椅子の上に腰掛けてをらるゝ、在りし日の面影を髣髴たらしめる様に造られたのであります。正面の板に彫刻されました、Asia is one と云ふ文句は、先生の御著書『東洋の理想』の巻頭語を、御令弟の岡倉由三郎氏が揮毫され、平櫛田中氏の彫刻であります。又其裏面の銅板の文字は、正木直彦先生の課并に書であります、鐫刻は清水龜藏教授に御願ひ致しました。屋根の頂上の擬寶珠は、帝國美術院會員香取秀眞氏に御依頼を致しまして、夫々非常な御盡力を得たのであります。

〔下略〕

かくて銅像は校庭のほぼ中央にある紅葉山（現在地）に建てられた六角堂の中から本校を見つめることとなつた。金沢庸治の報告（同誌）によれば、建物は藤原後期の様式に多少近代味を加えた純和風のもので、数百年を経た良質の木曾檜を用い、同年五月十九日竣工、同年九月二十三日に落成、施工者は曾我徳造であった。費用および制作期間は「金品寄付ニ関スル書類」によれば次のとおりである。

六角堂	七五〇〇円	昭和七年一月十日着手
		同 年八月二十五日竣工
原型	一〇〇〇円	昭和七年三月十五日着手
		同 年五月二十八日竣工

鑄造 二四〇〇円

昭和七年六月一日着手  
同 年十月十五日竣工

石台 七七五円

昭和六年十二月十五日着手  
同 七年三月十日竣工

なお、この銅像の建設について、新聞のなかにはこれを従来兎角対立し勝ちであった官展派と院展派の和解の象徴として報じたものもある。昭和六年九月二日の『東京朝日新聞』は「多年の反感を捨て帝展院展兩派の握手 恩師岡倉氏の像を回り美術の秋の快報」という見出しで大きく記事を掲載している。正木直彦が校長を辞任するのはこの翌年である。彼が建設を発案し、鋭意実現につとめたのは、在任中に美術界の禍根を絶ちたいという気持の現われであったのかも知れない。

#### ⑨ 岡倉由三郎を講師に採用

昭和六年十月六日、英語学の泰斗岡倉由三郎（一八六八〜一九三六）が英語授業担当講師（無報酬）に採用され、翌七年五月十四日に解嘱されている。しかし、これは全く名目上の採用で、米国トルドー市で開催される日本美術（日本画）展覧会に美術使節として岡倉を派遣するためにとられた措置であった。同月八日には早くも岡倉の外国出張の許可が文部省から下りているが、本校が作成した派遣上申案を見ると、出張地は北米合衆国および欧州諸国。期間は昭和六年十月から同七年三月末日までの約六ヶ月間、目的は米国並びに欧州諸国内における美術上の視察研究の爲めと記されており、また、旅費は本校校館費の内より支給とある。

昭和初期には中国、フランス、イタリア、ドイツ、ハンガリーなどで政府肝煎りの日本画展覧会が次々と開かれ、正木直彦は開催に

あたって指導的役割を果たしたが、昭和六年にはトレドー市、ニューヨーク市、サンフランシスコ市からも開催の申し込みがあった。そこで正木は政府（文部省）と協議の上、米国とわが国の美術界との掛け橋である岡倉天心ゆかりの日本美術院の横山大観を米国に派遣しようとしたが、大観に支障が生じたので、大観の推薦によって天心の弟である岡倉由三郎が派遣されることになったのである。本校講師として公務で出張するというかたちをとったのは正木の政治的配慮によるもので、岡倉天心記念銅像の建設といい今回のこの措置といい、退官を控えた正木の、日本美術院と官設展および本校との融合を図ろうとする姿勢を示したものと見えよう。なお、後述（608頁参照）のように岡倉由三郎の渡米は下村観山筆「天心岡倉先生」草稿が本校へ寄贈される一つの契機となった。

#### ⑩ 日本版画協会設立と本校版画科設置運動

日本の近代版画発展の基盤となった日本創作版画協会が大正八年に創立し、本校に版画科を設置することを活動目標に掲げたことは既に本書第二巻（786頁）に記したが、その後版画を試みる人が増え、関心が高まるにつれて、版画科設置問題も次第にクローズアップして来た。特に山本鼎はこれを強力に提唱した一人で、「版画展覧会を見て美校に版画科設置を熱望す」（大正十一年二月十七、十八、二十日『読売新聞』）などを読むとその熱意の程が窺われる。

昭和二年、第八回帝展の第二部（洋画）に初めて版画の出品が受理されて官設展でも版画家の活躍が始まった。このときの版画出品者は間部時雄、寺崎武男、諏訪兼紀、恩地孝四郎、前川千帆、吉田

博、織田一磨、永瀬義郎、亀井藤兵衛、野村俊彦、渡辺光徳らであった。こうした気運に促されてか、本校内でも翌三年春に校友会文芸部臨時部の一つとして版画部（椎ノ木社）が生まれ、彫刻科、西洋画科の生徒数名が和田季雄、鈴川信一らの指導の下に毎学期一回の小展覧会を開くようになった。部員の三木凱歌が『東京美術学校校友会月報』第二十八巻第三号に寄せた活動報告の中に「當校に西洋畫科の副科として、版畫部設置の論が起つて居る折柄、自分等はそのさきがけとなるべく努力したいと思ひます。」と記しているところを見ると、昭和四年七月頃には校内にも版画教育開始の兆しが見え始めていたものと思われる。翌五年春には本校教授岡田三郎助をはじめ、大久保作次郎、織田一磨、小出檐重、田辺至、寺崎武男、中村研一、間部時雄、渡辺光徳らが同人となって洋風版画会を起し、五月に第一回展を開いた。また、同年秋には留学以後盛んにエッチングの研究、制作を試みていた田辺至が『東京美術学校校友会月報』第二十九巻第五号に「エッチングの技法」と題する詳細な論文を寄稿している。これらはその気運を一層盛り上げたことと思われる。

昭和六年一月八日には日本版画協会が設立された。同会は日本創作版画協会、洋風版画会その他が合併して成立したもので、会長は岡田三郎助、常務委員に恩地孝四郎、碓伊之助、田辺至、前川千帆、平塚運一、山本鼎、清宮彬が就任した。そして、国際版画展覧会の開催、定期的版画展覧会の開催、学芸的版画の研究および東京美術学校に版画科を新設する運動を起すことを活動目標に定めたのであった。第一回展は同年九月に開催され、大きな反響を呼ん